シュルレアリスムと絵画 ―ダリ、エルンストと日本の「シュール」

会　　期：2019年12月15日（日）ー2020年4月5日（日） 会期中無休
会　　場：ポーラ美術館（住所：神奈川県足柄下郡箱根町仙石原小塚山1285）
開館時間：9:00-17:00（最終入館は16:30）
主　　催：公益財団法人ポーラ美術振興財団 ポーラ美術館
入 館 料：大人 1,800円（1,500円）、シニア（65歳以上）1,600円（1,500円）、大学・高校生 1,300円（1,100円）
中学生以下は無料
※（）内は15名以上の団体料金　※ いずれも消費税込
T　E　L：0460-84-2111
出品作家：ジョルジョ・デ・キリコ、マン・レイ、マックス・エルンスト、ジョアン・ミロ、ルネ・マグリット、サルバドール・ダリ、古賀春江、福沢一郎、北脇昇、三岸好太郎、吉原治良、瑛九、岡上淑子、成田亨、野中ユリ、束芋ほか

関連企画展

モードとアートの香水瓶―ポワレ、スキャパレッリ、ディオール
Mode, Art, Perfume: Poiret, Schiaparelli, and Dior

会場：ポーラ美術館 展示室4
協力：ポーラ文化研究所

シュルレアリスムが世界で展開した1920年代から40年代にかけて制作された香水瓶に焦点を当てます。フランスでは、ポール・ポワレが1908年に創設した「ロジーヌ香水」を発端にオートクチュールメゾンが香水を販売しはじめ、1920年代には各メゾンの世界観を演出するために香りが重要な役割を担うようになりました。多くのメゾンは香りはもちろん、瓶の形にも趣向を凝らし、時には同時代の芸術家たちもその造形に携わっています。
本展では、メゾンの世界観を表現した香水瓶から、芸術家たちが手がけた作品を中心に紹介します。ポワレを起点とし、ダリやシュルレアリスムのメンバーと親交を持ち、彼らの前衛的な表現をとり入れたエルザ・スキャパレッリ、そして定番として現代まで続いているクリスチャン・ディオールの香水瓶など、新たな表現媒体として香水とファッションが交差した時代の背景をたどります。

香水瓶「ショッキング」1937年 スキャパレッリ社
ガラス バカラ社製 13.2cm（台付）ポーラ美術館蔵

関連プログラム

記念講演会「シュルレアリスムと『超現実主義』」
講　　師：巖谷 國士（明治学院大学文学部名誉教授）
日　　時：2019年12月15日（日）14：00−15：30（13:50より館内講堂にお集まりください）
定　　員：先着100名（要当日入館券）

担当学芸員によるギャラリートーク
2020年1月25日（土）、2月22日（土）、3月14日（土）　各回14:00〜14:40

報道に関するお問合せ

ポーラ美術館広報事務局　プラップジャパン　担当：屋木、名取
TEL: 03-4570-3172 / FAX: 03-4580-9128 / MAIL: polamuseum.pr@prap.co.jp
住所: 〒107-6033 東京都港区赤坂1-12-32 アーク森ビル33F 私書箱562号

ポーラ美術館　広報担当：中西、井本
TEL: 0460-84-2111 / FAX: 0460-84-3108
住所: 〒250-0631 神奈川県足柄下郡箱根町仙石原小塚山1285

Press Release
［報道関係者各位］

2019年9月

Surrealist Painting

サルバドール・ダリ《姿の見えない眠る人、馬、獅子》1930年 ポーラ美術館 Salvador Dali, *Invisible Sleeper, Horse, and Lion*, 1930, Pola Museum of Art
© Salvador Dali, Fundación Gala-Salvador Dali, JASPAR Tokyo, 2019 B0432

シュルレアリスムと絵画 ―ダリ、エルンストと日本の「シュール」

2019.12.15|日|―2020.4.5|日|　会期中無休

ポーラ美術館
POLA MUSEUM OF ART
箱根 仙石原

―Influences and Iterations in Japan

シュルレアリスムと絵画
―ダリ、エルンストと日本の「シュール」

シュルレアリスムの100年。絵画の実験から束芋（たばいも）の映像まで！

展覧会概要

フランスの詩人アンドレ・ブルトンが中心となって推し進めた「シュルレアリスム」は、20世紀の芸術に最も大きな影響を及ぼした運動のひとつです。彼らは理性を中心とする近代的な考え方を批判し、精神分析学の影響を受けて理性の支配の及ばない無意識の世界に「超現実」を求める前衛的な詩作を繰り広げ、1924年には「シュルレアリスム宣言」を発表しグループとして活動を始めました。ドイツ出身の画家マックス・エルンストによる実験的な作品に美しさを見いだすなど、シュルレアリスムは詩や思想だけではなく絵画の分野にも拡大します。またスペインからこの運動に加わったサルバドール・ダリは「偏執狂的＝批判的」方法という独自の理論にもとづいて絵画を制作し、美術だけではなくファッション界をも巻き込む大きな流行を作り出していきます。

こうした動向は同時代の日本にも伝えられ、1930年代を通して「超現実主義」という訳語のもと、最新の前衛美術のスタイルとして一大旋風を巻き起こします。しかし、日本では「無意識の探究」という本来の目的を離れ、現実離れした奇抜で幻想的な芸術として受け入れられます。そして、しだいに東洋的な思想と混ざり合いながら独自の絵画表現や「シュール」という感覚が生まれるに至ります。本展は、西洋におけるシュルレアリスムの運動からどのようにシュルレアリスム絵画が生まれたのか、さらに超現実主義から、いわゆる「シュール」と呼ばれる独自の表現への展開に焦点をあてる試みです。

サルバドール・ダリ《ビキニの3つのスフィンクス》1947年 油彩/カンヴァス 40.6×51.4cm 諸橋近代美術館蔵
© Salvador Dali, Fundació Gala-Salvador Dali, JASPAR Tokyo, 2019 B0432

みどころ

1 シュルレアリスム誕生から100年。フランスから日本へ。その歴史と変遷をたどる初めての展覧会。

シュルレアリスム独特の実験的技法「オートマティスム（自動記述）」や「コラージュ」が出現したのは1919年。2019年はシュルレアリスム誕生から100年という節目にあたります。フランスで誕生したシュルレアリスムは、理性を中心とした意識では捉えきれない新しい現実を表現することをめざして始まりました。しかし、日本では現実の外にある幻想的な世界を表現するものとして受け入れられ、しだいに「シュール」という独自の発展を遂げ、映画や漫画にも影響を与えてきました。
この100年におけるシュルレアリスムの変遷と、フランスから日本、そしてアメリカ、アジアへの拡がりを約100点の絵画、版画によってたどります。さらに、現代におけるシュルレアリスムの展開を現代アーティスト束芋の作品でご紹介します。

北脇昇《独活》1937年（昭和12）油彩／カンヴァス 117×74cm 東京国立近代美術館蔵

2 デカルコマニー、フロッタージュなどシュルレアリスムからうまれた絵画の技法を紹介。

意識では捉えられない現実の世界を表現するために、画家たちはさまざまな探究をすすめました。主体的な判断や理性が及ばないものを捉えるために、偶然性や即興性を表現にとり入れます。これらの技法は、美術教育を受けていない人でも容易に取り組むことのできるものでした。難解な目的のために取られた、無意識という領域に迫るためのプリミティブともいえる絵画技法と、日本における絵画表現の変遷にみられるシュルレアリスムの受容のプロセスをひもときます。

マックス・エルンスト《百頭女》より 1929年 コラージュ複製／紙 25 x 19 cm
富岡市立美術博物館・福沢一郎記念美術館蔵
© ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2019 B0432

3 シュルレアリスムは日本の絵画に独自の発展を促し、さらに映画や漫画にまで広く浸透。

日本のシュルレアリスム絵画は、日本の画家たちが西洋からもたらされた絵画を、初めて独自の表現にまで昇華できたものと言えるでしょう。明治期以降、日本の画家たちは西洋の絵画の水準に到達するようつとめてきましたが、1930年頃から西洋のシュルレアリスム絵画を起点としながらも、西洋の画家とは一線を画す、独自の表現を追究する者たちが登場しました。西洋絵画の手法を画家たちが充分に消化していたことに加え、西洋の芸術の潮流が、リアルタイムで日本に流入していたという環境が、独自の表現の実現に影響を与えたと考えられます。
本展では、シュルレアリスムの受容を通して自由な表現を獲得した日本独自の「シュール」の世界と、それが源泉であると考えられる映像インスタレーションや、特撮映画、漫画など、現代における日本の芸術文化の発展に貢献したさまざまな表現をご紹介します。

ルネ・マグリット《生命線》1936年 油彩／カンヴァス 73.1 x 54.1 cm ポーラ美術館蔵
© ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2019 B0432

Chapter 1
シュルレアリスムの誕生 ― 1920年代、復興と閉塞から

第一次世界大戦終結後の復興の影で、1919年にブルトンを中心に若い詩人たちは、理性や判断を超えた表現を目指す「オートマティスム（自動筆記）」の実験をはじめ、無意識の世界を探究する芸術運動「シュルレアリスム」を展開します。彼らは積極的に画家たちとの交流を深め、ブルトンは1928年に『シュルレアリスムと絵画』を刊行し、絵画におけるシュルレアリスムの可能性を示しました。シュルレアリスムの草創期に関わりのあった作品を紹介します。

《福音書的な静物》
ジョルジョ・デ・キリコ

1916年 油彩／カンヴァス 80.5 x 71.4 cm
大阪中之島美術館蔵
© SIAE, Roma & JASPAR, Tokyo, 2017 B0432

様々なモティーフを集合させた作品。本来の意味から切り離され、寄せ集められた要素で画面が構成される。このような絵画は、「形而上学的絵画」と呼ばれる。

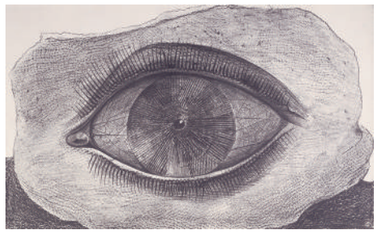
《夏》
ジョアン・ミロ

1938年 グワッシュ／紙 76 x 56.3 cm
ポーラ美術館蔵
© Successió Miró / ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2019 B0432

ミロはブルトンらと交流を持ち、絵画と同様に詩など文学を重んじた画家。
本作品は高級美術雑誌『ヴェルヴ』に掲載された挿絵の原画。詩と対で制作され、自由な色彩と有機的な形があざやかな画面をつくりだしている。

Chapter 2
超現実に触れる ― エルンストとダリ、物質とイメージをめぐる絵画

絵画におけるシュルレアリスム運動を代表するエルンストとダリは対照的な存在です。エルンストはコラージュやフロッタージュという素材と物質の実験的な手法を用いて思いがけないイメージを生じさせます。一方、ダリは特定のイメージを執拗なまでに反復したり、過剰な意味を読み込むことで、いくつもの異なる意味を引き出し変容させる独自の「偏執狂的＝批判的」方法によって絵画を制作し、人気を博しました。



『博物誌』より《光の輪》
マックス・エルンスト ※展示期間：2020年2月6日–2020年4月5日

1926年 コロタイプ／紙 43 x 26 cm 富岡市立美術博物館・福沢一郎記念美術館蔵
© ADAGP, Pars & JASPAR, Tokyo, 2019 B0432

木の葉や木目、麻布によるフロッタージュを用いた34点のイメージからなる版画集。エルンストは偶然によって導かれたイメージの組み合わせによって、天地創造から始まりイヴの登場で終わるという『創世記』を思わせる物語を作り上げている。

《姿の見えない眠る人、馬、獅子》
サルバドール・ダリ

1930年 油彩／カンヴァス 60.6 x 70.4 cm ポーラ美術館蔵
© Salvador Dalí, Fundació Gala-Salvador Dalí, JASPAR Tokyo, 2019 B0432

中央の人体は、馬やライオンなど、多様な読み取りができる「ダブル・イメージ（二重影像）」を利用したダリの代表作。地平線へと続く背景に、点景として描かれたモティーフが空間の広大さを強調する。空に浮かぶ雲は地上の岩のような形と不思議な相似形をなす。

Chapter 3
「シュール」なるもの ― 1930年代、日本における超現実主義

1930年代には、写真が多く掲載された雑誌に加えて同時代の海外作家の作品が展示される機会が増え、日本の前衛的な画壇でシュルレアリスムの影響を受けた作品が流行します。第二次世界大戦が迫り不穏な閉塞感が漂う日本において、シュルレアリスムは禅など仏教的な思想と結びつき、やがて「シュール」と略される独自の表現として展開していきました。

《雲の上を飛ぶ蝶》
三岸好太郎

1934年（昭和9）油彩／カンヴァス
91.5×60.6 cm 東京国立近代美術館蔵

三岸は1934年頃から、蝶や貝殻を題材とした、白昼夢のような幻想的な絵画世界を展開させた。
本作品は、現実に存在する様々な蝶や蛾が、澄明な青空に湧き立つ白い雲の上で舞う非現実的な光景によって強烈な幻想性を感じさせる。

《白い貝殻》
古賀春江

1932年（昭和7）油彩/カンヴァス
162.1 x 130.6 cm ポーラ美術館蔵

古賀が1929年の二科展に出品した絵画が、日本で初めて「超現実主義的」と称された。
本作品は蜃気楼の中に現れたような女性が髪や衣服を風になびかせる幻想的な作品。

Chapter 4
シュルレアリスムの戦後 ― 吉原治良（じろう）と瑛九（えいきゅう）たち

第二次世界大戦中に、フランスのシュルレアリストはアメリカへと亡命し、抽象表現主義の形成に大きな役割を果たしました。日本では戦後に「円」シリーズによって日本の抽象絵画を牽引する吉原治良をはじめ、戦前にシュルレアリスムを経験した画家たちが、独自の抽象的な表現を追究します。また、シュルレアリスムが開拓した実験的な技法や不条理な世界観は、映画や漫画の世界にも影響を与え、今日的な「シュール」な感覚に影響を及ぼしています。

《縄まとう男》
吉原治良

1931～1933年頃（昭和6～8頃）
油彩／カンヴァス 99.5×80cm
大阪中之島美術館蔵

潜水用の眼鏡をかけてホースを手にし、大量の縄を体に巻き付けて堂々と砂浜に立つ男性像。当時、吉原はデ・キリコの作品に傾倒しており、本作にも見られる異様な迫力を持つ謎めいた作品を制作した。

《小鳥》
瑛九

1951年（昭和26）フォト・デッサン
55.0×45.0cm 個人蔵

瑛九（本名：杉田秀夫）は、「フォト・デッサン」と呼ぶ手法により、複製ではない1点ものの写真作品を制作した。本作品では鳥と人の形を組み合わせ、エルンストが生涯を通して繰り返し描いた鳥のモティーフ「ロプロプ」を思わせるイメージを生んでいる。

シュルレアリスムのキーワード

「シュルレアリスム宣言」
ブルトンによって書かれた「溶ける魚」という散文的な文章の序文を、シュルレアリスムの基礎概念を明らかにするための「シュルレアリスム宣言」として改めた宣言文。

デペイズマン
分離を意味する接頭辞「dé」と「pays」（国）を合わせた「異国へと送る」という意味。モティーフを本来あるはずのない文脈におき、違和感を生じさせる。デ・キリコやマグリットの作品に多く見られ、ブルトンらはこの感覚に新たな美意識を見出した。

オートマティスム（自動筆記）
意識の介在しない無意識の世界を表現するための実験。思いつくままに高速で言葉を綴り、主体の理性や判断が及ばない文章を生み出す。

コラージュ
雑誌や書籍から切り抜いた画像を糊付けして新しいイメージを生む実験。画像の組み合わせによって新たな意味を生じさせる。

フロッタージュ（こすり出し）
凹凸を持つ素材の上に紙をのせてこすり、下層の模様をこすり出す手法。

グラッタージュ（削り出し）
フロッタージュを応用した油彩画の技法。凹凸のある素材の上にカンヴァスをのせ、絵具の表面を削ってカンヴァスの下の形を写し取る手法。

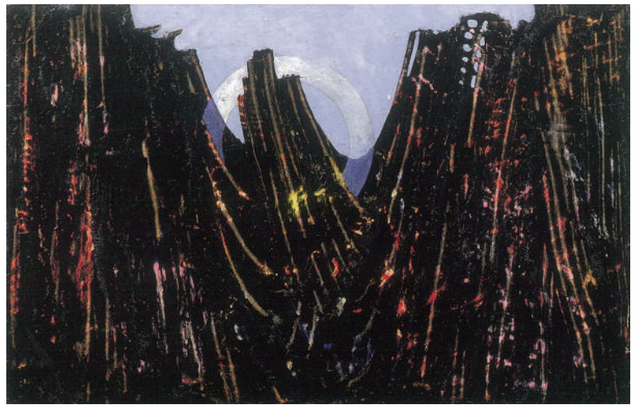
デカルコマニー（転写）
紙やカンヴァスに絵具を垂らし、平面を押し付けてはがし、にじみによって偶然の形や濃淡を生む手法。

「偏執狂的＝批判的」手法
フロイトが紹介する精神病患者の症例「パラノイア」を独自解釈したダリ独自の絵画理論。モティーフを過剰なまでに読み込み、複数の意味を喚起させる「ダブル・イメージ」を出現させ、無意識の世界の表出と考えた。

シュルレアリスムの変遷 ―文学から絵画へ

今日、シュルレアリスムの絵画は広く知られていますが、本来「シュルレアリスム」は文学を中心とした運動としてはじまりました。しかしブルトンは絵画でこそシュルレアリスムの世界を表現できると考え、『シュルレアリスムと絵画』という文章を発表しました。

しかし、ここでブルトンは「シュルレアリスム絵画とは何か」を定義することなく、独自の観点から同時代の作家を「シュルレアリスム的」な存在として取り上げています。「シュルレアリスムの絵画」に決まった形の特徴はなく、エルンストやダリ、タンギーなど多くの画家たちはそれぞれ独自の手法でシュルレアリスムの絵画を探究したのです。



マックス・エルンスト《森》1927年
油彩／カンヴァス 25×38.5 cm 岡崎市美術博物館蔵
© ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2019 B0432
※展示期間：2019年12月15日－2020年2月5日

サルバドール・ダリ《アメリカのクリスマスのアレゴリー》1943年
油彩／パネル 40.5×30.5 cm 富山県美術館蔵
© Salvador Dalí, Fundació Gala-Salvador Dalí, JASPAR Tokyo, 2019 B0432

シュルレアリスムから「シュール」へ

シュルレアリスム（仏：surréalisme）は、日本では一般的に「超現実主義」と訳されます。シュル（sur）というフランス語の接頭辞には、「超えている」「上の」という意味があります。さらには「強度」「過剰」を意味する場合があり、シュルレアリスムは後者にあたります。シュルレアリストたちは、現実の世界に「強度の現実」すなわち「超現実」が内在すると考えました。彼らにとっての「超現実」とは、夢や無意識の世界を解放することによって新しい価値を創造し、想像力を駆使して、夢と現実が矛盾することなく一つの世界を形作るような概念をさします。

日本の画壇では、1929年頃からシュルレアリスム風の表現が見られるようになります。しかしながら、日本の画家たちの多くはシュル（sur）を「超脱する」という意味で理解したきらいがあり、現実を超えた、現実とは異なる世界、すなわち今日の「シュール」という言葉が意味するような、現実の外にある空想世界に活路を見いだそうとする傾向がありました。

三岸好太郎《海と斜光》1934年（昭和9）
油彩／カンヴァス 72.8×60.5cm 名古屋市美術館蔵

北脇昇《春に合掌す》1942年（昭和17）
油彩／カンヴァス 72.5×91cm 名古屋市美術館蔵

シュルレアリスムの実験的技法と日本への伝播

シュルレアリスムの絵画技法

シュルレアリストが提示した芸術的手法である「オートマティスム（自動筆記）」は、理性の介入なしで言葉を綴っていく記述方式であり、無意識下に抑圧されている精神を解放することを目的としました。このオートマティスムを絵画にとり入れるために、シュルレアリスムの画家たちは、だれもが実践できる表現技法を開発しています。

たとえば、偶然の効果を画面に定着させるため、凹凸の上に紙をのせ、鉛筆やクレヨンなどでこすって模様を写し取る「フロッタージュ」や、それを油彩画において応用させた「グラッタージュ」。また、絵具をのせた画面の上に紙やガラスを押しつけ、それをはがす「デカルコマニー」や、新聞や雑誌から切り抜いたものを画面上で組み合わせる「コラージュ」などです。これらの技法がもたらす偶発的な形や痕跡は、画家の想像力を刺激し、無意識下のイメージを触発すると考えられ、絵画制作の理性的、意識的作業から芸術家を解放し、潜在意識を直接的に造形化できるものとして重視されました。

三岸好太郎《オーケストラ》1933年（昭和8）
油彩／カンヴァス 91×116.5cm 宮城県美術館蔵

部分拡大

チェロを弾く人物をスクラッチ（ひっかき）技法で表現するなど、躍動感あふれる画面を構築している。